

救急医療センター・救急総合診療科

救急医療センターの2017年度1年間の活動報告は以下のとおり。

【人員体制】

部長兼センター長 1名 センター兼任所属 8名

【「救急総合診療科」新設】

2017年10月2日より救急科を新設し、「救急総合診療科」と命名した。専従医は1名と、人員は心もとなないが、患者さんへいち早く医療を提供できるよう、近隣の救急隊との顔の見える関係を強化することで病院前救護から専門科による根治治療までの連携をスムーズに行える体制を整えていきたい。

【診療内容】

1) 救急車搬入数

年間の救急車搬送による救急患者受入れは、シーズンによる変動はあるが、おおよそ280～380件/月の搬送があり、本年の総計は3,691件で前年を122件下回った。入院率は46.2%であり、前年度(44.6%)より上昇している。搬入台数および要入院患者数を増やす策を考案・実行しつつ、入院率上昇傾向を維持できるよう努めたい。

2) 地区別搬送数

当院は、羽島郡、岐阜市南部、羽島市、各務原市、および愛知県一宮市の5地域を主たる診療圏としており、羽島郡広域連合、岐阜市をはじめ5地域の消防からの救急車を主に受け入れている。本年度は岐阜市からの搬入が最も多く、ついで羽島郡であった。隣県の愛知県一宮市からの搬入も多く搬送いただいた。また、搬送距離は長くなるが、各務原市や羽島市からの搬送も多くみられた。

その他、大垣市や愛知県江南市、郡上市、下呂市などからの遠距離搬送も受け入れた。

3) 入院数・入院率

救急車搬送された傷病者の全てが重症とは限らず、直接の帰宅や、他医療施設への紹介・転院搬送も行った。そうした中でも、重症であり入院を要した傷病者数について、本年度は1,703名(46.2%)であり、前年度の1,706名に比して3名減少した。

4) 来院時心肺停止(CPA)症例

搬入される傷病者の中で最も重症ともいえる

CPA症例も受け入れ体制にある。2017年度における受け入れ総数は84例であった。心肺停止の原因は、心筋梗塞、大動脈解離など循環器系疾患が最も多く、ついで窒息が多くみられた。その他、溺水や交通外傷などの外因によるもの、悪性疾患末期状態、高齢者の誤嚥性肺炎などを原因とする例も多くみられた。外来死亡は59例で、心拍再開を得られ入院した例が25例であった。前年の心拍再開例が12例であり、倍増している。病院前救護や当センターにおける処置の質向上を目指し、心拍再開症例数だけでなく、救命率・社会復帰率を高められるよう尽力したい。

5) 受入不能例

我々は、全ての救急症例を受け入れることを義務としているが、実際は必ずしも100%の傷病者を受け入れられたわけではなかった。2017年度は1年間に23例の受け入れができなかった例が存在し、前年に比べ1件増えた。受け入れ不能の理由として、①病床満床②専門科の別事案対応中のため受入不能③複数の重症例受入直後、といったものが目立った。例年の統計から、当院救急外来では7～9時と17～19時に受入台数が多い傾向があり、昨年度も例外でなく重症例が重なることがしばしばみられた。③に対して、救急医療センター人員の配置を見直すことで効率化を図り、受入不能数の減少に結び付けていきたい。

【2017年度 取り組み・実績】

<講習会>

1) BLS (Basic Life Support)

CPA状態をはじめとする急変症例が発生したことにより“コード99”で各部署のスタッフが召集されるケースを経験することが多く、その際の初期対応をより効果的に行うことを目的に、BLSを開催してきた。2017年度には計11回、83名の受講者を修了させた。

2) ICLS (Immediate Cardiac Life Support)

近隣施設の学会認定インストラクターの協力のもと、当院職員と近隣の救急救命士を受講対象としICLSコースを計4回開催した。心肺停止状態にある症例に対するBLSおよびALSの質をいかに高めるかという内容を1日かけて習得するコースである。昨年は計34名の受講者が修了した。

今後の課題として、インストラクターを院内スタッフから育成するとともに、質の高いコース開催を目指したい。

3) ISLS (Immediate Stroke Life Support)

ISLS コースを2月10日に開催した。今年度で自院開催は2回目となる。本コースは、脳神経に対する二次的神経蘇生処置に関するもので、対象は主に超急性期脳梗塞であり、血栓溶解療法を実施するまでの診療を効率化することに目的がある。意識障害の評価スケールやNIHSSに関する知識を深め、vital signを確認しながら診療アルゴリズム体験を行う「シナリオ」を内容に盛り込んだ半日コースである。同日には10名の受講生を修了させた。今後も、ICLSと同様に定期開催を積極的に予定していきたい。

<診療外業績>

1) 羽島救急カンファランス

10月19日に国立病院機構 災害医療センター臨床研究部長 小井土雄一先生にお越しいただき、「大災害にむけて、動き始めた新しい災害医療」というタイトルでご講演いただいた。聴衆には、院内各スタッフや他施設DMAT、近隣消防職員と岐阜医療圏の災害活動を支える多くの方々にお越しいただいた。

2) 救急ワークステーション設置

救急総合診療科を新設するとともに、羽島郡広域連合消防本部の協力のもと、救急ワークステーションを新設した。

救急ワークステーション体制とは、救急隊員が救急車両とともに、基地となる病院で待機しながら、平時には、救急救命士を含む救急隊員は病院実習を行い、救急医療に関する知識及び技術の向上を図り、また現場活動直後にカンファランスを行うことでさらなる質の向上や迅速性を目指して活動を計画し、緊急時には救急隊出動の際、当院の救急医療センター医師も必要に応じて同伴し、現場で必要な救命措置を行うことができる体制のことである。

同体制をとることで、患者さんへの観察・処置を、より早期から医師の管理下で行えるというメリットがあり、救命率向上及び後遺症の低減に寄与できることが期待される。

2017年度は、10件の医師同乗での出動を経験できた。病院への傷病者受入要請をより簡略化で

きるため、現場活動時間が大幅に短縮できた傾向にあった。ただ、幸いにも重症例には遭遇していない上観察のみで移動しているため、重症例に対応可能な装備を整えるとともに処置技術の向上と処置要否の選別を行えるよう日々精進していきたい。

3) 災害訓練

本年度は、10月5日に羽島郡広域連合消防本部が実施された多数傷病者発生NBC災害時訓練（本部立ち上げ訓練含む）にDMATとして参加させていただいた。災害想定は、「トラック対タンクローリー車の衝突事故」で、タンクローリー車から有害物質が漏出したというもので、ゾーニング・除染・トリアージ・搬送の手順を訓練した。当院DMAT隊員がトリアージ・搬送のゾーンの人員として参加させていただいた。

また、当院での訓練は、11月10日に今年も東南海地震を想定した机上訓練とし、ゲートコントロール・人員&情報の動線確認を実施した。また同時に、本部立ち上げ・運営も実施した。現場に人員が十分でない状況であったため、各現場指揮官担当者が現場活動に入ってしまう場面が散見されたが、有事の際には同様に人員が不足することが常であり、今後の改善点として次年度訓練へ持ち越した。

4) 消防合同勉強会

個々の消防との勉強会を2015年度より開始した。開催は今年も定期開催化できず、8月22日に羽島郡広域連合消防本部との勉強会が唯一であった。同会の内容は、実事案を4例提示いただき、活動隊の疑問点の解消と活動内容を会場全体でディスカッションするといったものであった。今後も開催を安定化し、地域病院前救護の質を高め、消防・病院間連携を強めていきたい。

〔文責：八十川雄図〕